

第 28 回国際経済協力セミナー

公衆衛生と動物衛生の接点 国際機関の接点

講演者：宮城島 一明氏

国際獣疫事務局 事務次長

文責：永井哲平

草案作成：市原雄介 藤谷実央
岩崎佳奈子 上谷若葉 今川雄介
阿部佑輝 遠山綾乃 川越もゆら
塙真知恵 塚本英現 名倉絵里佳
高木陽奈子 斎藤実由貴



宮城島氏は 1986 年から 1998 年まで厚生省において、地域保健、母子保健、精神保健、医事・医学教育、国際協力などの分野の行政実務および研究に携わる。このうち 1994 年から 1998 年まで、世界保健機関(WHO)に派遣され、食品保健に関する業務に従事する。さらに氏は 1998 年 2003 年まで京都大学大学院医学研究科助教授を務めた後、2003 年 10 月に FAO/WHO の合同事業である国際食品規格委員会(Codex Alimentarius Commission)の事務局長に就任、手続きの可視化や総会の毎年開催など一連の改革に取り組む。2009 年 8 月に国際獣疫事務局(OIE)科学技術部長に転じ、2010 年 1 月から事務次長を兼任する。講演では、まず国際獣疫機関(OIE)の紹介 DVD を見た後、公衆衛生と動物衛生の関連について話された。

About OIE

World Organization for Animal Health (OIE)は、1924 年に設立された歴史のある国際機関である。本部はパリにあり、世界に 5つのオフィスと 6つのサブオフィスを持つ。加盟国は 178 カ国である。しかし規模は小さく、パリ本部に 60 人、東京支部には 10

人ほどしか職員を持たない。国際協力には二国間のものと多国間のもの、また有償資金協力と無償資金協力に分けられるが、OIE の役割は加盟国間での議論や意見の統一を行い、二国間での国際協力とは大きく異なっている。主な仕事は公衆衛生、動物の健康および福祉、食品の衛生と安全性、経済などにおける衛生管理であり、迅速さが求められるとともに、正確な情報収集が重要である。OIE の職務には間接的に人間の健康を守るということが含まれるが、これは近年ハクビシン由来と考えられる SARS や H1N1 インフルエンザなど動物由来のウィルスが蔓延しているためである。

How they work?

OIE の活動目的には以下のようなものがある。

1. 世界で発生している動物疾病に関する情報の提供
2. 獣医学的科学的情報の収集、分析及び普及
3. 動物疾病の制圧及び根絶に向けた技術的支援及び助言
4. 動物及び動物由来製品の国際貿易に関する衛生基準の策定
5. 各国獣医組織の法制度及び人的資源の向上
6. 動物由来の食品の安全性の確保、科学に基づいたアニマルウェルフェアの向上

活動するに際して様々な国際機関と協力しており、特に国連食糧農業機関(FAO)と世界保健機関(WHO)と協力して、病気に関する情報の交換、科学に基づいた国際的標準の作成、加盟国の能力開発などを行うことが多い。また、国益を優先して不利益な情報を隠ぺいする国もあり、いかにうまく事実を引き出すかも重要な課題となっている。

Relation with Japan

OIE は世界数か国に支部を持っているが、それらや OIE 本部で働く日本人の数は非常に少なく、OIE は EU 圏、特にフランスが主体となっている機関である。そのため、日本は資金の拠出はするが物言わぬ国となってしまっている。

Conclusion

着実にグローバル化が進んでいる今日の社会において、ヒトやモノの移動は従来とはくらべものとならないほど活発化している。それは感染症などの流行も同じであり、これからの社会における OIE の役割はますます大きくなっていくと考えられる。

質疑応答

Q. 感染症発生の事実の隠ぺいにどのように対策を行うのか？

A. 隠ぺいなどについて、多国間では明確に罰則を規定することは難しい。根気よく当

該国に働きかけ事実を引き出し、おなかつ国際社会から生じる過剰なバッシングに対して可能な限りのアフターケアをすることが重要である。

Q. 日本政府は OIE に対してどれほど貢献しているのか？

A. OIE への支出金の負担では、日本はフランスに次いで第 2 位であり、かなりの金額の支援を行っている。しかし、日本人は技術的に優秀であるにも関わらず、引っ込み思案であり、自分の意見を言える人材が少ないことが問題である。そのため、日本は資金の拠出はするが物言わぬ国となってしまっている。

今回の講演では、公衆衛生と動物の衛生の関連についてはもちろんのこと、OIE の役割・業務内容、他機関との連携について知ることができる貴重なものであった。質疑応答も活発に行われ、学生たちの国際協力への関心を向上させるものであったに違いない。